

氏名	王 憶冰			
ヨミガナ	オウ オクヒョウ			
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第685号			
学位授与年月日	令和4年3月25日			
学位論文等題目	（論文）胡蝶の夢 （作品）写真メディアにおける物質的想像力 -加速への抵抗として			
論文等審査委員				
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 時啓
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	川瀬 智之
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	小沢 剛
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（美術学部）	伊藤 俊治

（論文内容の要旨）

「かつて、あった」という写真の本質は、デジタル時代になって変化し、私たちは「写真的イメージ」の流動性、断片性、多重性に直面するだけでなく、常に更新される視覚的現実、あらゆる光学芸術の絶え間ない収束に直面している。これらのハイブリッドなイメージは、新しい知覚となり、私たちの世界に対する認識を形成していく。近年、写真の物質性への注目が高まっていると言えよう。その流れの中で、現代社会に見られる非物質的性格と、写真における物質性の強調の関係を考える上で、現代フランスの思想家ポール・ヴィリリオの理論は特に重要であると考えられる。

「速度」は、ヴィリリオが提唱する重要な命題である。彼によれば、テクノロジーはスピードの表象に過ぎないが、スピードはテクノロジーの本質である。現代社会はあらゆるレベルで加速しており、その加速が高速に入ると、現代人はそのスピードに包まれて孤立し、安定した形で触れたり知覚したりすることができなくなるという。周囲の世界との関係が変化し、もはや物質的に密接な関係を維持することができず、不安定で非物質的なつながりしか持たなくなってしまうからだ。最も直接的な感覚は、自分自身の連続性の頻繁な中断、ショックとペースの変化の繰り返しの経験、視覚的次元の頻繁な更新と通過、そして外界の非物質化と仮想化だ。本論では、「加速」がこのような変化をもたらす原因であるという仮説について述べようと思う。そこから自作を考察して、写真イメージを物質的なメディアに受容するという制作方法を解説する。その行為は、物質と触覚的な経験を通して身体性を回復するためであり、「加速」への抵抗であるというのが本論の主張である。

第1章では、現在、私たちがどのような画像を写真と考えているのか、また、どんな社会的背景がこのような状況を生み出しているのかを問題とし、その背景について述べる。私たちは今日の「写真」という言葉をハイブリッドなイメージとして指すが、写真の透明性の喪失は、このハイブリッド性だけでなく、私たちの社会の変化、デジタル技術の社会の形や「イメージ」との関わり方、世界との関わり方が根本的に変わってしまったことに起因すると考える。現代社会では直接的に存在するすべてのものが表現に変えられ、風景は私たちの消費の主な対象となり、デジタル技術は私たちの認識を再構築することで私たちの現実を変えている。ヴィリリオの速度理論は、この変化の核心である加速による「身体の喪失」を指摘するものだろう。

第2章では、そのような現代において、ヴィリリオが提唱した「消滅の美学」を解説する。加速によって、人々はテクノロジーを通して世界を認識し、テクノロジーによるこの認識方法は「消滅」を提示する。「消

滅の美学」とは、したがって、加速の中で生まれてくる美学である。加速するテクノロジーは、人々の知覚システムを変化させ、時間、空間、現実の知覚に変化をもたらし、ショック、めまい、パニックなどを伴う美的体験をもたらす。ヴィリリオによれば、「消滅の美学」は伝統的な芸術と新興芸術の境界であり、現代では、アナログ画像を特徴とする安定した静的な「出現の美学」から、網膜上で存続したり消滅したりするデジタル画像を特徴とする「消滅の美学」に変化した。素材の永続性が視覚の永続性となり、芸術の形態が変化し、伝統的な芸術の境界が消え始め、絶え間なく続く「無辺の芸術」へと向かっていくのだ。このような状況で、身体性を回復するためには「出現の美学」へ移行して、物質の重要性を再喚起する必要がある。

第3章では、前章の内容を踏まえて、ガストン・バシュラールの物質的想像力論と関連させながら、自作の考察を行う。私は石、水、蠟など、触覚的に手応えのある物質を写真のメディアとして使っている。イメージを物質的なメディアに定着することによって、イメージは視触性を持つことになる。イメージは物質の表面に浮かんでいるが、物質の性格がイメージの奥までに染み込んでいく。私は、そのような「消滅」に対する「出現」を、スピードへの抵抗として追求するものとして考えている。この行為に求められるのは、自分の存在を身体で確認すること、現実世界とのつながりを確認することだ。

デジタル技術によってより「加速」している時代において、イメージは本体を失い、視覚だけ残って、網膜上で発生するものになっている。このようなイメージの力に影響され、支配されている私たちは、身体性を喪失し続け、世界とのつながりが薄くなっている。物質は世界とのつながりを喚起することができる、自然物質の奥底から私たちの意識に課せられた力が由来している。写真イメージを物質的な形で提示することでは、加速するプロセスに抵抗することはできないかもしれないが、その意志が重要であることに変わりはない。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、執筆者である王憶冰が、自らの写真作品における物質メディアの使用を、デジタル時代の写真的イメージとの関連において根拠づけようとするものである。

まず第一章では、デジタル化の進む現代において、写真的イメージが従来の写真概念では捉えきれないほど変容したものであること、その背景にはフランスの思想家、ポール・ヴィリリオの言う加速する現実があるということが述べられる。

第二章では、そのような時代における芸術のあり方が論じられている。デジタル化が進行することによって、芸術も、モニター上に明滅するイメージとなり、持続する物質の支えを失っている。このような芸術のあり方は、「消滅の美学」と呼ばれ、そこでは身体性が欠如しているとされる。

第三章では、「消滅の美学」に対置される「出現の美学」が論じられる。王は、哲学者のガストン・バシュラールの思想を援用する。バシュラールの言う物質的想像力とは、人と自然の触覚的交わりから形成される想像力であり、地・水・火・空に分類される。王は、デジタル時代に失われた自然と身体との触覚的交わりが、バシュラールの思想に見出されることを指摘したうえで、自らの作品について論じる。自然物をメディアとする王の写真は、作者の、ひいては鑑賞者の身体が自然の事物に触れることをその重要な要素としているのであり、その点においてそれらの作品は、デジタル時代において急速に進む加速への抵抗として位置づけられるのである。

審査会においては、写真における物質性を扱うに際して、写真史的な視点が足りないことや、必ずしも全体の論旨にそぐわない論点が含まれており、論文としての整合性に欠けることについての指摘がなされた。しかしながら、急速な加速化を特徴とする現代のデジタル社会への抵抗として自然物を写真のメディアにするという論の運びには、博士論文として十分な説得力が認められると判断された。

(作品審査結果の要旨)

加速度的に変化、更新され続ける視覚的現実や光学芸術のスピードに王さんは問題意識を持った。王さんは物質性に着目し、その現象に抵抗を示せないかという意思を作品で表明した。その背景には中国の小さな田舎の町で育った王さんの幼い頃は自宅にはラジオしかなく、写真もたいへん貴重品だったところから現在のテクノロジーに囲まれる生活の変化のスピードは尋常ならざるもので、問題意識を持つのは自然の流れと言えよう。

そして本作品を「胡蝶の夢」と題した。「胡蝶の夢」とは中国の「荘子」の言葉を由来とし、夢の中で蝶になって自由に楽しく飛び回っていたところから目が覚め、自分が蝶なのか蝶である自分が人間になる夢を見ているのかという夢と現実の区別がつかない状態を指している。

そして「胡蝶の夢」という考えを手がかりに、王さんがかつて制作した様々な方法論、様々な物質で制作した写真を再結合、再加工し展示した。それらはいずれも大変繊細な表現で、多くはUVプリンターによるものだ。それは凹凸のある様々な素材にでもプリントが可能な技術である。この展示では石板、紫陽花の花びら、薄いロウ板にプリントをした。石版は永遠性と同時に、大変薄いゆえはかなさも備えている。ロウ板や紫陽花の花びらのプリントは、いつその物質的生命が消えてしまいそうな儂い美しさを感じさせている。中央に巻物のように横長に配置したパノラマ写真は紙にプリントしたものだ。これは故郷の橋で、建造されたことにより、山の中の小さな町が外の世界に開き、旧高度成長が始まった象徴と察する。橋は文明以前から人間の生活に寄り添い、単なる通路という機能の他に、怪異譚や、神話が世界中の橋にある。この橋はかなり巨大なようで、不自然な歪みが不安に感じずにはいられない。これは動く列車の窓から携帯電話のカメラでのパノラマ撮影によるものだ。パノラマ撮影の特性と限界を利用し様々な思考を積層させた作品である。これらの作品は「胡蝶の夢」という哲学的な命題を含む言葉に集約され、それぞれの作品の関係性をつなぎ合わせ見事に展示した。これらは大学美術館での博士審査展で審査員達からの評価を得た。

(総合審査結果の要旨)

王憶冰は学部時代に中国の大学において写真を専攻した。そしてデジタル技術を学び合成技術などを駆使した作品を制作したが、その後物質的な表現に回帰していく。写真はデジタル技術により進化する一方で「かつて、あった」という根本的な明証性がゆらぎ、さらに多様性が増している。そのような流れの中であって特に自然の物質に関わる表現に関心を持ち始める。

本学博士課程の修了制作ではデジタル技術を用いたパノラミックな表現が、移ろう時間とともにズレを生み出す作品と、イメージを天然の物質にプリントしたものを提出した。同時に博士論文は表題の「写真メディアにおける物質的想像力ー加速への抵抗として」と名付け、世界がデジタル化によりスピードが増して行くように、写真表現も多岐にわたり変化していること。そのような状態であってより低速な物質性にこだわった写真表現について論考している。

本論は写真への関心の動機付けから始まり、現在のテクノロジーの急速な展開をポール・ヴィリリオの言説を元書き起こし、テクノロジーはスピードの表象に過ぎなく、スピードはテクノロジーの本質であり、現代社会はあらゆるレベルで加速し、その加速が高速に入ると、現代人はそのスピードに包まれて孤立し、安定した形で触れたり知覚したりすることができなくなる、といった加速による「身体の喪失」を指摘する。

それに抗う自身の制作を、ガストン・バシュールによる物質的想像力論と関連付けながら考察する。物質的なメディアにイメージを定着することによって、視触性を持たせ、イメージと塗布された物質の性格によって知覚のスピードを遅延させる事を試みる。

そのような物質世界や自分の存在を身体で確認すること、現実世界とのつながりを確認することをスピードへの抵抗として追求する。この行為に求められるのは、そのような「消滅」に対するカウンターと

しての「出現」を目指す事につながるとする。

情報化社会の中で身体性が喪失し続け、世界とのつながりが薄くなっていく中で物質は世界とのつながりを喚起することができる。写真イメージを物質的な形で提示することで、社会が加速するプロセスに抵抗することは困難ではあるが、その意志を持ち続けることが重要であることを結論とする。

提出された修了制作作品、及び論文ともに優秀で本学博士課程修了として相応しいレベルであり、合格とする。